

草のなかの線路
安西水丸



草のなかの線路 安西水丸

草のなかの線路

安西水丸

1994年1月31日 第1刷

発行者 徳間康快 発行所 徳間書店

東京都港区新橋4-10-1 郵便番号 105-55

電話 03-3433-6231 振替 東京4-44392

印刷所 (株)廣済堂

カバー印刷所 近代美術

製本所 大口製本印刷

定価は帯・カバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします 〈編集担当 佐藤綾子〉

©1994 Mizumaru Anzai Printed in Japan

ISBN4-19-860054-6

目 次

ボートハウスの夏

砂丘

39

草のなかの線路

61

哀しみ

83

五月の白い空

105

7

薔薇の葉書

125

アコーデオン

145

一人綾取り

167

落

189

あとがき

222

装幀 安西水丸

草
の
な
か
の
線
路

ボートハウスの夏

ボートハウスは四角い箱を二つ並べたようにして水面に浮んでいた。周囲は白いペンキで厚く塗られ、ところどころ板壁がささくれだっている。板壁には、ボートハウスという文字が太いゴシック体で書かれていた。一つの文字は、サッカー・ボール五個分ほどの大きさがあった。

ボート場は、赤坂見附あかみづけから四谷よちやにかけてわずかに残る外堀を利用してできていた。水をたたえた範囲はちょうどCという字の形をしている。Cの字の内側になるあたりはこんもりとした森だった。森は急勾配きゅうばいな土手になっていて、斜面を上りきった中心部には超高層のホテルが建っていた。このあたりはそんなホテルを中心とした公園地帯でもあった。ボート場のある外堀には、清政橋という古い橋が架かっていた。地下鉄の赤坂見附駅からは歩いて数分だった。

大学を出て勤めた広告会社を二年ほどやめた。ぼくは失業中だった。ボートハウスでのアルバイトにはまったく理由がなかった。気まぐれとだけいい。それでもどこか人並みに、何もしていないよりはといった気持があったのかもしれない。会社ではデザインの仕事をしていた。美術系の大学を卒業と同時に入社した会社だったが、はじめからどうもしっくりとかなかった。

もう少し辛抱すれば、団体生活にも慣れていったのだろう。とにかく先きのことは漠然としていて考えがつかなかった。

自宅が赤坂にあったので、清政橋あたりはよく散歩コースにしていた。ボートハウスでアルバイト募集の貼り紙を見つけたのも、清政橋を散歩中の時だった。アルバイトは、一週間のうち火、木、土の三日間となっていた。棧橋には誰もいなかった。水には白いボートが一艘浮んでいた。草色の水面に考えもなくゆらゆらとゆれている。それは、どこか今の自分に似ているとおもった。アルバイトをはじめたのは雨期だった。今は夏になっている。二十六歳だった。

朝から強い陽ざしがあった。清政橋に入ると、ボート場の水面におおいかぶさっている木立のなかで蟬が鳴いていた。深い木立の中央に、超然と立つホテルの白壁がまぶしかった。

ボートハウスにはいつも午前の十時までに行く。清政橋を渡り切った袂横から細い石段を下りる。棧橋が朝露で濡れて光っている。水面がひたひたとゆれていた。

ボートハウスに入り、窓を開けた。蒸し暑い室内に風の入るこの一瞬が好きだ。椅子に腰をおろし、ショート・ホープを一本吸った。扇風機のボタンを押した。建物の関係からか、ここにはエア・コンディショナーがなかった。古い首振り式の扇風機が天井に近い壁に取りつけてある。室内は六畳くらいで、それにトイレと小さな流し台がついていた。ヨットのキャビンみたいだった。

ボート客の料金窓口のカーテンを引いた。ボートの時間は一時間単位で、一時間九百円となっ

ている。

田仲七江が清政橋を歩いてくるのが見えた。彼女は二年ほど前からここで働いているらしい。濃いグレーのタイトスカートをはき、半袖の白いウイング・カラーのブラウスを着ている。そんな恰好は、どこもボートハウスで働いているようには見えない。だからといって普通のOLとおもえない。どちらかと言えば書店の女店員などに近い。妙に痩せていて、色疲れのようなものがあつた。田仲七江は六月に三十一になったばかりだった。

「おはよう。今日もすごく暑くなりそう」

田仲七江はブラウスのいちばん上のボタンあたりをつまんで言った。

「きつくなりそうですね」

ぼくは言った。

ボート置場は清政橋の下になっている。二つある橋杭の間に貸しボートがそれぞれ二十艘ばかり入っていて、そのほか、棧橋にはいつも四、五艘のボートを舫っている。

艦綱を引いて、ボートの上にかけてあるナイロン製のフードを払った。フードに溜った朝露が流れた。乾いた布でボートの濡れた部分を拭いた。

「田仲さん、ひと廻りしてきます」

田仲七江に声をかけ、ボートに乗った。午前の早い時間、いつもボート場をひと廻りする。それは巡視のような仕事も兼ねていた。

ボートの中央部に腰をおろした。グラスファイバー製のボートは、夏の陽を受けてすでに熱くなっていた。ボート場の縁は、昔ながらの外堀の石組みが残っている。土手の上からうっそうと

繁るクスやケヤキが水面に枝をのばしていた。

木陰の下を漕いだ。オールを水中に入れると、水は水飴みずあめのようにのびた。ボートは水面を切り裂いて進む。木陰を出ると、陽は容赦なくボートと、ボートの上のぼくに照りつける。ボート場に沿って、高速四号線が走っている。ハイウェイを行く車のルーフがちかちかと光っていた。

ボートハウスを見た。水色の作業服に着替えた田仲七江のうしろ姿がある。両手で髪をうなじで留めているところだ。気怠るような動作には妙な色気があった。

アルバイトをしたいとボートハウスに行った時、窓口にいたのは田仲七江だった。彼女は無愛想に引出しからアルバイトの申し込み用紙を出した。用紙に記入して、履歴書といっしょに公園の管理事務所へ持って行くように言った。面倒そうだった。ぼくは言われたとおりにした。

「いいとこにいたのに、もったいないねえ。こんなところをやめるなんて、ねえ」

公園管理事務所で、初老の職員がぼくの履歴書を見て言った。唇を舐める癖があった。初老の男にしては赤い唇をしていた。ぼくは自分のいた広告会社が、東京でも大手に属していたことをあらためて感じた。

会社をやめたことがよかったのか失敗だったのか、それはわからない。やめて数日後、銀座を歩いている下請会社の社長の鈴木に会った。毎日のようにぼくのいた会社へ仕事を取りにきた男だ。

「会社をやめたんですってね。まあ世のなかきびしいところですから」

鈴木は猫背の肩をややいからせて言った。鈴木は、かつて新入社員だったぼくに、五万円入りの封筒を持ってきたことがあった。それは仕事を得るためのワイロだった。彼の気まずそうな表

情は今でもおぼえている。たしかに世のなか、きびしいのかもしれない。しかし、もうこの男に札入りの袋をもらうこともないだろうとおもった。

会社をやめた時、ぼくはAクリエティブ・ルームに属していた。エンゼル製菓の新聞広告キャンペーンで連日忙しかった。会社をやめたのは、サラリーマンがいやになったこともあるが、仕事に疲れたことの方が大きい。

辞表を提出したのは上司の戸部ディレクターにだった。当時、戸部は部下でコピーライターの女との不倫で頭がいっぱいだった。

「いいねえ、若者の行動力は……。わたしなんか、やっぱり生活がねえ。しかし愛情は人間にとって偉大なものなんだ」

戸部は、ぼくの辞表を目にしながらかんかんことを言った。

退社後、一カ月ほどして会社の同僚だった友人と酒を飲んだ。

「戸部ってディレクター、あいつは最悪だぜ。あいつ君のこと、なんにもできないのに会社やめてどうするつもりなんだなんて言いまわってるんだ。許せねえよまったく」

友人はそんなことを言った。

戸部ディレクターがどんな男かはどうでもいい。いずれにせよ、彼は広告マンとして数々の話題広告を世に出しているのだ。

「戸部の奴、もし君が成功したら俺があいつを坊主にしてやるからな」

友人は酒の勢いもあってか、息まいた。

成功……。それは何だろうか。グラフィック・デザイナーとして名をあげることだろうか。巨

大なデパートや、電機メーカーの広告にたずさわることかもしれない。デザイン協会から大賞を得ることもかもしれない。まだいろいろあるだろう。ぼくは少し酔った頭で、ピントの狂った双眼鏡を何度も合わせようとしていた。

アルバイトをはじめた日は、午後から雨になった。雨期に入っていたこともあって、このころよく雨が降った。雨になると、ボートハウスは何もすることがなかった。

ボートハウスに下りる石段の脇に山吹やまぶきが咲いている。湿った濃い緑のなかで、こぼれるような山吹の花は、淡い陽ざしに見えた。

田仲七江はトランジスタ・ラジオからのヘッド・フォンを耳にさし込んでいつも音楽を聴いていた。どちらかというと無口な方だった。それは、ぎりぎりと言いたねじがもどらないように手でぎゅっと押えているみたいだった。ぼくには、いつか彼女の手がねじからはなれるようにおもえた。

ボートハウスの横に飲みものを売る自動販売機がある。田仲七江はそこで時々コーヒーやコークを買ってくれた。

「これでね」

飲みものを買いに行くぼくに、彼女はそんな言い方でお金を手わたした。女の仕種しぐさだった。田仲七江に日に日にうちとけた。

「あなたのこと、わたしわかろうとしてる」

田仲七江の表情から、時折りそんな言葉がつたわることがあった。

雨期の間は客が少なかった。仕事の帰り、時々田仲七江を地下鉄赤坂見附駅近くの喫茶店へとさそった。

「いいわね、家が近い人は。わたしなんか一時間以上だから」

田仲七江は京王線の調布から通っていた。生れは山口県の萩だと話した。背丈は一六〇センチほどだろうか。身体は痩せていた。あまり目立たない顔つきだったが、目立たない分だけ、内に秘めた女の蜜の豊かさを感じさせた。

ボート場を一時間ほどかけてひと廻りした。ボートを下りた。田仲七江は料金窓口に向って週刊誌を読んでいる。

「ああ、暑い。帽子がないと日射病になりそうだ」

ぼくは扇風機に身体を向けた。

「こんなところにきて後悔してんでしょう」

田仲七江は週刊誌を閉じて言った。

「ええ、失敗でした」

ぼくは言った。

「でしょう。心配だったのよ、はじめから」

田仲七江はぼくの目をじっと見た。